

タイトル：「リユースライフ」

著者名：和織

文字数：7,399

あらすじ

朔が命を断とうとした瞬間、そこに明人という男が現れる。自身も死ぬことを決めていた明人は、自分という存在を譲る為の相手を探していた。朔は顔を変えそれを受け継ぎ、彼の人生をリユースして生きていくことにする。

登場人物

東野朔（28）・殺人犯の息子

佐々木明人（32）・会社員

上野里奈（21）・大学生

店員

○明人の部屋・寝室（朝）

ベッドで眠っている朔（明人の顔）、目を覚まし、しばらく天井を見つめている。  
声・朔「俺という人間がこの世から跡形もなく消えた日から、目が覚める度に、顔に穴が開いているような予感がする」

○同・明人の部屋・洗面所

洗面台の鏡を見る朔、顔のパーツを一つ一つ確かめる様に触る。  
声・朔「ずっと在ったものが無くなったことに慣れるのには、時間がかかるだろう。でも仕方がない。俺はもう、自分のいない世界でしか生きていけなかった」

朔「・・・よく見ると、わりといい顔なのかも」

○同・明人の部屋・キッチン

朔、キッチンで不慣れな様子でグラスを取り出し、水を入れて飲む。  
探るように、いくつか棚を開いてみる。  
物は少なく、整頓されている。  
引き出しを開くと、色々な銘柄のコーヒー豆が並んでいて、その上にメモが置いてある。

メモ・『適当にいろいろ買い揃えておいた。餞別を楽しんで』

朔「本当、律儀な人だな・・・」

○同・明人の部屋・寝室

クローゼットを開ける朔、中に並んでいる服はどれもクリーニング済。  
黒いパーカを取り出して羽織る。

○街（朝）

ジョギングをしている朔（明人の顔）、息切れして、立ち止まる。

朔「体力、ヤバ・・・」

息を整えて歩き出す。

ポケットに手を入れると、何かが当たる。

取り出してみると、ライター。

× × ×

煙草にライターで火をつける明人。

○コンビニ（朝）

朔（明人の顔）、食料をカゴに入れ、レジへ向かう。  
レジにカゴを置いてから、奥の煙草の表記を見つめる。

× × ×

明人が手にしているマルボロの箱。

× × ×

朔「(マルボロを指さして) あれも、ください」

○マンション（朝）

朔（明人の顔）、階段を上がっている。  
上からドタバタと駆け下りてくる足音。  
踊り場に里奈が飛び出してきて、そこで朔と向かい合う形になる。  
里奈、驚いたように立ち止まり、朔をじっと見る。  
朔、ゆっくり会釈をし、通り過ぎる。  
里奈、行ってしまう朔を振り向く。

里奈「久しぶり、ですね」

朔「(恐る恐る振り返り)・・・しばらく、入院、してたので」

里奈「え、じゃあ大きな怪我されたんですね？事故とかですか」

朔「ええ、まあ。骨折とか、顔、も、ちょっと」

里奈「ああ、だから・・・雰囲気、変わったなって・・・」

朔「あの、すいません、僕ちょっと、その、記憶が・・・」

里奈「記憶？」

朔「後遺症らしくて、自分のことをよく覚えてなくて。ごめんなさい、僕らは、どう  
いう・・・？」

里奈、目を見開いて、戸惑いの表情。

里奈「・・・それは・・・大変ですね。すみません、私、ただの隣人で、お話したこと  
は・・・殆ど、なくて」

朔「そう、ですか・・・あの、多分、急いでましたよね？」

里奈「はい・・・」

朔を見つめ続ける里奈。

朔、困惑の表情。

里奈「私、上野里奈っていいです。困ったことがあったら、言ってくださいね」

朔「ああ、はい。どうも」

里奈「(嬉しそうな表情) じゃあ・・・また！」

里奈、階段を駆け下りていく。

朔、ため息。

#### ○明人の部屋・ベランダ (昼)

朔 (明人の顔)、ベランダへ出てくる。

ポケットに入っていたライターを取り出し、じっと眺める。

朔「どうしても、一回試させたい訳ね・・・」

煙草を取り出してライターの火をつけ、恐る恐るフィルターを吸う、が、すぐにむせ返る。

朔「・・・何きっかけで始めたんだよこんなの・・・」

携帯灰皿を取り出して煙草を押し込み、ふと、思い返すように考える。

声・朔「あの人がいつから煙草を吸ってたのか、俺は、そんなことすら知らない」

#### ○崖 (夜)

崖を登っている朔、頂上に辿り着いて、茫然とした表情で海を眺める。

明人「死ぬのを見ててもいい？」

朔、驚いて振り返る。

笑顔でそこに立っている明人。

朔、しばらく明人を睨んでから、その場を去ろうとする。

明人、朔の前に立ちはだかる。

明人「ごめんキモいこと言って。冗談のつもりだったんだけど、声のかけ方を間違えた。気分を害したなら申し訳ない」

朔「害するほど気分なんて残ってないです。見られたくないんで、出直すんで、お先にどうぞ」

朔、行こうとするが、明人、また道を塞ぐ。

明人「ちょっと、そのまま、真っ直ぐ立っててくれないかな」

朔「は？」

明人「背丈は問題ないっぽいから」

明人、一步離れ、朔を下から舐めるように見て、頷く。

明人「なるほど・・・ちょっと、手を見せてもらっていい？パーにして」

朔、眉を顰める。

明人、満面の笑みで微動だにしない。

朔、面倒くさそうに手を出す。

明人、朔の手に自分の手を重ねる。

朔、顔を歪める。

二人の手の大きさがほぼ同じことに、嬉しそうな表情をする明人。

明人「今日が運命の日だったか」

#### ○車内（夜）

車は道路を走っている。

明人が運転し、助手席の朔、全てがどうでもいいという表情。

明人「しょっちゅうあそこに行ってきた、まあ、物色してたんだよね。知ってて行ったんだらうけど、あそこは確実に死体が上がらないから、本当に多いんだよ。で、君みたいに、周りに迷惑かけたくないって人がああいう場所を選ぶでしょ。どうせなら、そういう人の方がいいなって」

朔「・・・・・・・・」

明人「この先にうまい店があるんだ。お腹空いてる？心配しないでね、俺本当に、詐欺とか犯罪集団の人間ではないよ。話して信用してもらえなかったら、それまでにしてくれていいからさ。なんならまた、さっきのとこまで送るよ」

朔、無表情で明人の横顔を見る。

#### ○店（夜）

賑わっている店内。

明人と朔、席につく。

明人、朔にメニューを渡す。

明人「先に好きなもの頼んどいて。俺一本（煙草を吸うポーズ）吸ってくるから」

明人、席を立つ。

朔、明人の背中をチラリと見てから、メニューに目を落とす。

朔「・・・食いたいのかよ」

× × ×

明人が戻ってくるのとほぼ同時に、店員が料理を運んできてテーブルに置く。

明人「お、いいチョイス」

店員「めずらしいですね、お友達と」

明人「そうなの、たまには。(朔に) あれ、酒は？」

朔「いやさすがに……」

明人「飲めるなら飲んでよ。俺いつも車で飲めないから（店員をチラリと見て）申し訳なくてさ。ビールでいい？」

朔、渋々頷く。

明人、追加の料理もいくつか注文する。

店員、笑顔で去る。

明人、料理を取り皿にとる。

明人「ほら早く食べな。ここさ、本当に何でもうまいんだよね」

朔、自分の皿に料理をとる。

朔「……本当に、しょっちゅう行ってるんですね。あそこに」

明人「言ったじゃん。まだ、疑ってる？」

朔「……信じろって言う方が……」

明人「まあそうだよな。君はまともなんだろうな」

朔「自殺……しようとする奴がまともですか？」

明人「まともだから死のうとしたんでしょ。狂ってたら、他人のことなんか平気で傷つけながら生きようとするんじゃないの？ そうなるのが嫌だったんでしょ？」

朔「さあ……どうだろう。もう、どうでもいい、って気持ちしか……」

明人「君に比べたら俺なんか、ほぼ何の苦労も知らないようなもんだよ」

朔「不幸な人間が偉いとか思ってないですから」

明人「ごめん、そういうつもりで言ったんじゃないんだ。わかったようなことを言っ  
て悪かった。ただ、俺の人間としての経歴が、わりとクリーンだってことを言  
いたかっただけ」

朔「そのクリーンな——」

店員「ビールお持ちしましたあ」

店員、ビールを朔の前に置いて去って行く。

朔「なんでわざわざ、そのクリーンな経歴を、（声を落とす）命、を、捨てるんですか？  
俺は、平穩に生きられた記憶なんて殆どないです。だからあなたの言うことは、  
到底信じられない」

明人「そうねえ……生まれたときから、おかしかったんじゃない？ 生きれば生きる  
程、生きていくことに興味なくなっちゃってさ。ほら、自殺しても、別に魂が  
消滅しちゃうとかじゃないでしょ？ 前に解消できなかったタスクを背負って輪  
廻転生する、って言うじゃん？ だから俺は、それ早めにしようかなって」

朔「言ってること訳わかなんないし、死んだ後のことなんて知りません」

明人「まあ、簡単に言うと、生きてることに飽きたんだよ。それなら、ちょっと想像  
できるんじゃない？ 君は生きてることにうんざりした訳でしょ？」

朔「まあ……」

明人「死んだ後のことは俺にだってわかんないよ。その、わかんないことが、生きて  
まま経験しようのないことがさ、唯一心惹かれるものになっちゃったんだ。だ  
けどね、同時にもったいないとも思うんだよ。犯罪歴もないし、納税してるし、  
平均的な経験と暮らしを得てきたこの、どこにもほころびのない、平凡な存在  
がさ。だから、リユースできないかなって」

朔「リユースって・・・」

明人「そもそもね、俺自身短命である可能性が高いんだよね。両親共に病気で他界し  
てるんだ。母は七歳のときで、父は・・・四年前かな。で、親戚とも疎遠だか  
ら、今はほぼ天涯孤独の身なんだよね。君のような人にはうってつけの額縁だ  
と思うんだけど」

朔「額縁？」

明人「額縁の中身を、そっくり上に描きした別の画にすり替えちゃっても、きっと誰  
も気づかないってこと。元々中にあったのが、なんてことのない作品だから。  
後はまあ、事故で記憶を失くしたことにでもすればいいし、今の俺くらいに、  
なるべく目立たないように生きてれば・・・」

明人、店員が来るのに気づき、言葉を止める。

店員、料理を手際よくテーブルに置く。

明人「ありがとう」

店員「ごゆっくりどうぞ」

店員、去る。

明人「これこれ、俺のおすすめ」

明人、料理を取り分ける。

朔「・・・目立たないように生きるのは、得意です」

明人、手を止め、朔を見て笑う。

#### ○明人の部屋・キッチン（夜）

朔（明人の顔）、手動のコーヒーミルで豆を挽いている。

声・朔「あの人の死が確定的なものだってことは、出会ってすぐにわかった。  
死へ向かう人間の空気を、あの人も纏ってた。そしてそれは、俺よりもずっと  
濃くて分厚いように感じた」

挽いた豆をフィルターに入れ、ハンドドリップでコーヒーを淹れる。

朔・声「いなくなるから、何も知る必要はなかったんだ。だから多分、あれは  
余計なことだったんだと思う。俺にとっても結局、生きることにしがみつくと  
への、言い訳みたいなものだった」

○喫茶店（昼）

明人と朔、向かい合って座っている。

朔、明人の胸ポケットの煙草の箱に目を留める。

朔「うまいんですか？それ」

明人、ポケットを見て箱を取り出す。

明人「試してみる？一本とっていいよ」

朔、首を振る。

明人、残念そうな表情。

明人「それで、話とは？」

朔「俺のことなんですけど・・・」

明人「うん」

朔「俺の母親、俺が七歳のときに人を殺しました」

明人「(表情が消える) うん」

朔「父親は最初からいなくて、知りません。ほぼネグレクトだったし、殺された男のことも、よく知らないし、知りたくもないし、知ってもしょうがないし」

明人「うん」

朔「今後も母親に会うつもりはありません。俺は、十六から働き出したんですけど、どこへ行っても、俺が人殺しの子供だってことを、誰かが嗅ぎつけるんです。だからどの仕事も、2, 3年がいいとこだったんですけど、最後のカフェの仕事はわりと長く続きました。でも結局、また同じことが起きて、だけど、そのときに、俺その店のオーナーに救われました」

明人「救われた？救われたの？」

朔「(頷く) その人、「気にするな」って言ってくれたんです。そういうこと言ってくれる人初めてで、だから自分のことが周りにバレた後も、半年はその店で働き続けました。でも、結局はそれが、死ぬこと選ぶ決め手になりました」

明人「なるほど・・・大事な人ができたと同時に、その人に、自分のせいで危害が及ぶ恐ろしさを知った訳だ」

朔、頷く。

明人、朔の前にあるホットコーヒーを眺める。

明人「君、本当にコーヒーが好きだよ」

朔「これが、バロメータだったんです」

明人「バロメータ？」

朔「その日一日を生きるかどうか。朝起きて、コーヒーが飲みたいと思えたら、今日生きていようって」

明人「で、あの日はそう思えなかった」

朔、頷く。

明人「なんで俺に話したの？」

朔「なんでって、そりゃ・・・」

明人「そのオーナーさんはさ、いい人だと思うよ。でも俺はね、悪い人間ではないけど、良い人間でもない。オーナーさんみたいに、君を救う人ではないんだ。俺は自分の思う通りに望みを叶えようとしてるだけで、それに君という存在が必要だけなんだよ。全て、自分の為にやってることなんだ。だから俺に感謝とかしなくていいし、情みたいなものも、持つべきじゃない。君はこれから急に4歳年をとらなきゃいけないくて、その君が生きていく世界に、俺が存在することはあり得ないんだから」

#### ○明人の部屋・ダイニング（夜）

朔（明人の顔）、カップを手にソファに座る。

コーヒーを一口、じっくりと味わう。

朔「・・・うま。いくらすんだこれ」

カップをテーブルへ置き、テーブルに置いてあったタブレットを手に取り電源を入れる。

声・朔「あの人が生きているときは、質問はしない方がいいって、ただそう思ってた。でも、今になって訊きたいことがどんどん湧いてくるのは、罪悪感が頭に植え付けられたってことだろうか。根付いてしまった疑問の木は、永遠に答えを失ったまま、実をつけ続けるのか」

タブレット画面にあるは、明人が自身に関することを記しておいたもの。

経歴と財産に関する情報のみで、最後に「以上」、とだけ。

朔「こんな、簡潔にまとめちゃって・・・。結局あんたのことは、煙草が好きってことしかわかんないよ」

なんとなく画面に触ってみると、次のページにメッセージがある。

朔「あ・・・」

タブレット画面・『俺の運命の人へ』。

朔「運命の人・・・」

声・明人「この世界は、俺には必要なくなった。この世界にも、俺は必要なくなった。その考えが間違っていたとして、そう思い続けるのが俺という存在だったんだ。だから救ってほしいと思ったことは、一度もない」

#### ○明人の部屋・ベランダ（夜）

煙草を吸いながら、タブレットにメッセージを入れている明人。

声・明人「でも君を少し羨ましく感じたことは、正直ある。ふざけんなって感じだろ？ごめんね。ただ、そうなったことにはちゃんと理由があったんだなって、君を見て気がついたんだ。俺は、両親を早めに失くしはしたけど、それでも、普通という幸福は、いつも当たり前にあった。そしてこの世界には、そんな人生と平行して、人の命がゴミと同じ扱いをされるという事実が、生まれたときから存在していた。俺は、そのコントラストが濃くなればなる程、恵みを感じれば感じる程、感謝よりも虚しさを深めた。そして何かの為に、誰かの為になれる筈だった自分を、いつの間にか殺してしまった。だけどあの夜の君は、死の直前でさえも、生きることを望んでいるように、俺には見えた」

× × ×

○崖（夜） 崖を登ってくる朔、立ち止まり、満天の星空を見上げる。

朔「（無表情のまま）綺麗だな・・・」

明人、朔の様子を物陰から観察している。

× × ×

夜空を見上げる明人。

崖の上程ではないが、そこに星が光っている。

声・明人「知っての通り、俺は良い人間ではないけど、君に自由に生きてもらいたいと思うのは本当なんだ。それに、確信できる。人殺しの子を救おうとした「いい人」は、そのことを後悔なんかしてない。そんな人がオーナーの店なら、記憶を失った男であっても、その人柄を見て雇ってくれる」

○明人の部屋・ダイニング（夜）

朔（明人の顔）メッセージを読んでいる。

声・明人「朔、それは新しい人生じゃない。柵のなくなった、君の人生だ。したいことを迷わなくていい。君が、毎日コーヒーを愛し続けることを祈ります」

朔「嘘つき。全部、俺の為じゃん・・・」

○崖（夜）

崖を登っていく明人。

声・明人「最後にもう一つ。どういう訳か、隣に住んでいる女の子は隣人に気があるみたい。でもその隣人はというと、ずっと気づかないフリを続けて、彼女を避けるばかりだったんだ。でも、記憶を失くした隣人だったら、自分に気のある女の子と、どんな会話をするだろう？君は気分なんか残ってないって言

ってたけど、今の俺はそれを想像して、最期まで楽しい気分にいるよ」  
明人、頂上に辿り着き、微笑んで、何かを呟く。

○明人の部屋・ダイニング（夜）

朔（明人の顔）、タブレット見つめたまま、固まっている。  
徐々に涙が滲む。

朔「…………おせっかい」

タブレット画面が暗くなり、朔、そこに映る自分を見る。

朔「本当に、もういないんだね、あんた」

○明人の部屋・寝室（朝）

寝室で寝ている朔（明人の顔）。  
インターホンが鳴る。  
二回目、鳴る。  
三回目が鳴ったと同時に、朔、起き上がる。

○同・明人の部屋・玄関

朔、ドアを開ける。

里奈、紙袋を抱えて立っている。

里奈「おはようございます。ごめんなさい起こして。賞味期限が今日までなので。冷凍してくれてもいいんですけど」

朔「……はあ」

里奈「（紙袋を指し出す）私パン屋でバイトしてるんです。このおいしいですから、食べてみてください。アレルギーとかありますか？」

朔「いや（受け取って、中を見る）……こんなに、いいんですか？」

里奈「はい。もらえたり、割引もあるのでいつも買いすぎちゃって。よかったら」

朔「ありがとうございます」

朔、しばらく里奈をじっと見る。

里奈、瞬きをしながら見つめ返す。

朔「俺、あなたのこと知らないんです」

里奈「え、ああ……はい」

朔「あなたは俺を知ってると思ってるかも知れないけど、実際何も、知りませんよね？」

里奈「ああ、そうですね」

朔「もしかしたら俺、人殺しの子供かもしれないですよ？」

里奈「え・・・」

朔「そういうこと、考えて、接した方がいいです」

里奈「あのでも、人殺しの子供なら、人殺しじゃないですよ？」

朔「・・・冗談です」

里奈「冗談、独特ですね」

朔「すみません。まあ、俺、良い人間ではないので、そういう想像もしてみたってことです」

里奈「・・・あまり良くないことしか浮かびません」

朔「でしょ？」

里奈「でも良くないことって生きてたら普通にあるし、私もこの先、人殺しの子供になる可能性がない訳じゃないですよ？」

朔「・・・・・・・・」

里奈「じゃあ、学校なんで。またパン持ってきますね」

里奈、去って行く。

朔、扉を閉めて、しばらく茫然と紙袋を眺め、笑い出す。

## ○崖（夜）

崖の頂上に立って微笑んでいる明人。

明人「君はどうか最後まで、上手く使ってくれ」

微笑んだまま飛び降りる。